桐一葉

高二　渡邊利雄

風もないのに姿姿と散る梧桐に秋が来た。吹く風降る雨鳴く蟲、月や星の光天地總べてが見る人をして襟を正さへる様な秋。僕は此の秋を迎へる毎に何人ともいへない緊張した気分になる。勉強しなければならぬ。勉強したいと強く心のうちに叫ぶのもかうした秋に對した時の事である。實際僕は年毎になつかしい此の秋を待って居たものである。過去三年以前父に別れた僕は此の秋に接する毎に悲しい様な淋しい様な深い〳〵感に打たれた。今又此の夏慈母と仰ぎつゝ敬慕してゐた舟田先生に逝かれて……熱涙は止めどなく我が頬を流れた。夢だ〳〵世の中は總べて夢の如くである。無常である。夏の蟬秋の蟲の生命のはかなきが如く、人間の生命もかく、はかないものと思ふ。僕は底知れぬ淵の様な死を實に恐ろしいと思ふ。父の死、舟田先生の死は深く〳〵僕の頭に刻まれて忘れる事の出来ない二つの印象である。漸く秋深くなって蟲の音も次第に細り銀杏の黄ばむ頃となったが月の澄みきった宵、しめやかに秋雨する日、父を慕ふ。僕がたえ難い淋しさに打たれる懐ひ……。春が戀しい。春が戀しい。

なき先生をあゝ春が戀しい。